CONTENTS

COMBAT

2016.Feb.
No.479

2

Cover Design
Favorite Graphics Inc.
Cover Photo
TOMO HASEGAWA
©WORLD PHOTO PRESS 2016

※本文中の価格は消費税込みの
総額表示です。

【第1特集／ウエスタン アームズ】

008 総力特集
リアリティを追い求める ウエスタン アームズ
010 国本圭一インタビュー
019 ウエスタンアームズ社員インタビュー
020 WAマスターピース・モデル
028 マグナブローバック・システムの誕生と進化
032 WA製品カタログ
034 SVIプロシューター・モデル
038 ブローバック・ガスガンの歴史を書き換えた WA／M4A1シリーズ
042 現行モデルカタログ
054 ウエスタン アームズ渋谷店 紹介

055 ToyGun Report
WESTERN ARMS
WA 40th. Commemoration Model
ホーグ K.K. スペシャル
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

【第2特集／ミリタリー】

062 **GEARLOG FINAL**

102 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
2015年海兵隊FORCE RECON&MEU最新装備Part.3
●解説:松原隆 ●撮影:山崎 学

117 Militaria Roundup!
ミリタリー・フライトジャケット Part.1
●解説:菊月俊之

148 自衛隊の力こぶ
ドーンブリッツ 15
●Report by Masayuki Kikuchi

170 BATES
STRIKE TACTICAL
●Photos&Text by Tomo Hasegawa

【第3特集／ガン】

072 **AA-12 実銃レポート**
●Report by Hiro Soga

080 東京マルイ
GLOCK 34
●Photos&Text by Taku

086 シューティングのために生まれた
コンペティション・モデル
GLOCK34
●Photos&Text by Muneki Samejima

004 COMBAT FRONT LINE

092 NEW GENERATION STYLER
●by Fujiwara

112 Goods & Accessory

116 ミリいじ技研

128 PRESENT

146 FEAR NOT THE DARK……
Power of Light
SURE FIRE
act15 ミニマイズされる高性能
●Photos & Text Tomo Hasegawa

152 兵装嗜癖
●by Fujiwara

156 トイガンニュース
156 WA コルトMkⅣシリーズ'70《9ミリ・ルガー》
157 WA ワイルドホーク《Ver.SARABA(さらば)》
158 WA コルトM1911《ゲッタウェイ／ビンテージ・エディション》
158 WA ベレッタM92Fs《ダイハード・タイプ／バトルダメージVer.》
159 タナカ コルト・コンバット・バイソン3インチ"Rモデル"HW

160 PROJECT NINJA
●morizo(東京装備BAKA)

162 走って撃って楽しんで
サバゲ放浪記 ゆい散歩 其の15 千葉編
取材:上矢ゆい

164 サバゲ三等兵
●by 織本知之

216 中田商店グッズ

218 S&Grafグッズ

129 GAME OVER THE TOP
132 軍事見本市 ADEX ●取材:菊池雅之
136 USショーティングライフ! ●鮫島宗貴
138 読んで覚える TakuのHOW TO Shooting 射撃のススメ
142 サバゲ三等兵異聞 ●狩野健一郎
188 装備エンスー道 ●福田真夫
189 富士見スポーツシューターズ主催 APS公式練習会
193 バックナンバーリスト
194 ミリタリー・コレクション
196 レア・ミリタリー・コレクション
198 A STITCH IN TIME
199 死ななきゃ食える! 救荒食指南
200 狩野健一郎のシネマ放浪記
201 狩野健一郎の新作DVD紹介
202 蛙のゆびさき(中山 蛙)
204 戦車兵通信 WORLD OF TANKS
206 コンバットマガジン・インフォメーション・センター
207 読者プレゼント応募方法
208 編集後記

マグナブローバックという機構を開発し、
エアソフトガン界に革命をもたらしたメーカー、
それがウエスタン アームズだ。
実銃の持つ重量、そして
質感を徹底して再現するその姿勢は、
ファストドロウの名手として
日米で圧倒的な実績を残した、代表の熱い思いと
それに呼応した社員たちの
工夫と努力によって生み出されている。
トイガン界のリヴィングレジェンドとして君臨する
ウエスタン アームズのすべてが、
今ここに明かされる。

【特集】ウエスタン アームズ

総力 WESTERN ARMS

リアリティを追い求める

INTERVIEW

Keiichi Kunimoto

国本圭一

ホーグ・カスタム・ガバメントに魅せられ.45オートとともに伝説を作った男

舞台は、1976年 アメリカ・ミズーリ州。
インターナショナル・コンバットピストル・コンフェランス（ICPC）の
レザースラップ(早撃ち)決勝に彗星のごとく登場した日本人に、
ギャラリーの視線は釘付けとなっていた。その名は国本圭一。
ヒップシュートと愛用のカスタム・ガバメントを武器に、
抜き撃ちの試合を次々と勝ち上がり、今まさに決勝の時。
背後では、誰もが知る早撃ちの世界チャンピオン「マーク・リード」
.45オートの世界チャンピオン「レイ・チャップマン」のふたりが、興奮ぎみに
「You win ! You win !（お前の勝ちだ）」と応援していた――。
拳銃の世界で生きると堅く決意し、周りの強い反対を押し切って、
アメリカに一人渡り、3人のレジェンドと、愛用銃.45オート・カスタムとの
出会いによって、ICPCで、実弾による早撃ち第3位にまで上り詰めた。
そんな彼は、後にエアソフトガンメーカー「ウエスタン アームズ」を立ち上げ、
マグナブローバックを生み出し、日本にカスタムガンという概念を持ち込むこととなる。
ここでは、彼がそこに至るまでの、軌跡を振り返ってみることにしよう。

日本一の早撃ちガンマン

～モデルガンの申し子と言われた少年～

――小学生の頃からテレビの西部劇は欠かさず見るほどの大ファンで、中学1年生の時、アメリカ製のピストルのおもちゃが欲しくて、アルバイトをしてお金を貯めたそうですね。

当時上野のアメ横の中田商店[注1]で売っていた、ピースメイカーそっくりの銃とホルスターがどうしても欲しかったんです。日本人の平均月給が15,000円くらいだった時代に、銃とホルスターで約7,000円。父親は「ピストルを欲しがるとはけしからん」と言うので、じゃあ自分で働いて買おうと、新聞配達を始めたんです。夕方、学校が終わってから配るんですよ。最初はきつかったんですが、そのうち1時間走り続けても息が切れなくなりました。配り方も上手くなって、道端からシュッと投げると、玄関の隙間にスパーン！ と入る。早撃ちのためにはいいトレーニングになりましたね（笑）。3ヵ月続けたところで、父親が驚いて「そんなに欲しいか」と、足りない分を出してくれました。

――結局お父上から許しが出たのですね。

念願の銃を手にしたことが嬉しくて嬉しくて、寝ても覚めてもいじくり回していました。分解して掃除したり、ガンブルーを塗ってみたり。もちろんガンアクションを練習して、いつの間にか西部劇のシーンに登場するガンプレイや早撃ちのシーンは、全て出来るようになっていました。とにかく学校で寝てるか、拳銃をいじくり回してるか、ご飯を食べてるか。その3つしかしていなかったですね（笑）。

――解説書などはなかったでしょうから独学ですよね。

映画やテレビで見る西部劇がお手本でした。食い入るようにアクションシーンを見て覚えました。若い時の脳みそって、不純物が入っていないから、結構吸収出来るんですよ。

――その頃、日本では空前のウエスタンブームが沸き起こり、西部劇の愛好者団体「ウエスタンクラブ」が結成されましたが、そこにも入会されたそうですね。

13歳の時、ガンプレイと早撃ちを習おうと思ってウエスタンクラブに入会の申し込みに行くと「どんなことができるのか、見せてくれ」と言われました。ガンプレイと早撃ちをやって見せたところ、皆が目を丸くして「君より上手い奴は、うちのクラブにはいない」と言われ、今度は私が目を丸くしたものです。翌日から開催される「国際GUN祭り」に出演し、ガンプレイを披露することを条件に、入会を許可されました。

翌年、アメリカで9年連続ロデオ世界チャンピオンに輝いたケーシー・テイブス率いるワイルドウエストショー（日本興行名：大西部サーカス）が、東京の千駄ヶ谷体育館に来たんです。数あるショーの中で、私が釘付けになったのが、全米実弾早撃ち世界チャンピオンであるマーク・リード[注2]の早撃ちとガンプレイだったんです。

――後に「Blood Brother（義兄弟）の契り」を結ぶまでになったマーク・リードとの出会いですね。

主催者に便宜を図ってもらい、私は好きなように出入り出来る通行証を貰えたんです。学校が終わると、毎日会場に直行ですよ。ステージに出るマークを客席から観たら、次は楽屋に行ってマークにくっついて遊ぶんです。日曜日はそれこそ朝から晩まで、マークの傍に入り浸りでした。マークも19歳で若かったから、毎日怪しげな英語で、怪しげな早撃ちを見せにくる私が面白かったんでしょう。ショーが終わると、マークが使っている本物のコルト・シングルアクションを持たせてくれたり、手入れの仕方を教えくれたりしました。この時、日本に持ってきていた2挺のコルト.45SAAは、コルト社から世界チャンピオンになったマークにプレゼントされたものでした。

マークの鮮やかなガンプレイと早撃ちを見て、同じように自由にSAAを操作できるよう、毎晩寝るまでトレーニングをしたのを思い出しますね。約2ヵ月くらいそんな生活を繰り返していた私は、日本公演が終わりマークがアメリカに帰国してしまった後、心にぽっかりと穴が空いたような寂しさを覚えました。と同時に、マークのように、拳銃で生きていくことを真剣に考えるようになっていきました。

当時立川にあった米軍基地にウエスタンクラブが招待された時、ガンプレイと早撃ちを披露し、大きな喝采を浴びました。そこで、米軍射撃クラブの会長と親しくなり、基地内の射撃場で本物の拳銃を撃つ許可を貰ったんです。S&Wダブルアクション・リボルバー、.30口径M1カービン、.22口径ロングライフル弾を使用するスターム・ルガーピストルなど、いろいろな銃を自由に撃たせてもらいました。中でも、その弾丸の大きさ・逞しさ故に、.45口径コルト・ガバメントモデルに、強い魅力を感じました。この実弾射撃の経験が、生涯拳銃で生きていこうと決意する、もうひとつのきっかけだったといえます。

――そこから銃の道へとさらに進んでいかれたのですね。

高校に進学し、大学を卒業して社会人になってほしいという両親の期待の声は、全く私の耳に入らなかったですね。しかし15歳の少年であった私には、高校進学しないという選択は許されませんでした。やむを得ず入学したものの、毎日考えることは、何とか退学にならないか、ということ。教科書は全て学校の机に入れっ放し、鞄に入っているのは弁当だけ、授業中は常に居眠り、試験は名前しか書かない。家に帰ればガンプレイと早撃ちのトレーニングに1日6時間を費やす。そんな生活を数ヵ月続けましたが、1年生の夏休みに家出。学校は退学しました。

当時、仕事が忙しかったんです。洋画配給会社の西部劇の映画日本公開に先立って、プレミアショーのステージで早撃ちを披露したり、テレビの仕事に呼ばれたり。

――日本初の拳銃殺陣師として初めて仕事をされたのは？

田宮二郎主演のアクション映画『犬』シリーズで「拳銃の先生」を探していて、私のガンプレイと早撃ちを見た大映の関係者から「一度お会いしたい」と、電報が来たんですね。早速大映の調布撮影所に行きました。すると主演の田宮二郎さんや監督が待っていて、年若の少年の私に戸惑いながらも「まずは拳銃の腕を見せて下さい」と言ったのです。空いているスタジオに3人で行き私は得意のガンプレイと早撃ちを披露しました。一瞬沈黙があり田宮さんと監督が何やら話をしてしばらくして田宮さんから「是非お願いします」と言われました。

日本映画界初の拳銃殺陣師としての作品は『喧嘩犬』（1964）でした。田宮さんにガンプレイを教えたり撃ち合いのアクションシーンの振り付けをしたり、連日深夜に及ぶ撮影も楽しいものでした。もう時効だと思いますが、当時16歳だった私は、深夜の撮影が労働基準法でNGのため、19歳ということで大映と契約していました（笑）。この作品はその年の興行成績第3位になり次の作品からはカラーで正月、春休み、夏休みの年3本のペースでシリーズ化されました。3年近くシリーズが続き最後の作品『早撃ち犬』(1967)の撮影の合間、田宮さん

マーク・リードと。互いにジム・ホーグによる.45オートカスタムを手にしている。（“GUNS & AMMO”誌提供）

ホルスター、ベルト、バックルは「goro's」の高橋吾郎のオーダーメイド品。

注1：中田商店　日本を代表する老舗サープラスショップ。現在は、世界各国のミリタリー用品や革ジャン等を取り扱う。代表者の中田忠夫氏は、実際に戦場で使用された軍服や軍装品及び戦争資料の蒐集家として知られ、その知識は豊富。若き国本氏に中田商店製モデルガンの組立てを依頼した。

注2：マーク・リード　Thell Reed。国本氏が「生涯の友」「生涯の拳銃の先生」と呼んで憚らないシングルアクションの名射手。15歳でファストドロゥの世界王者に輝き「早撃ちの天才」と呼ばれる。愛称の「マーク」は、少年時代からの射撃記録更新“Mark”に由来。現在もハリウッド映画のガンコーチとして活躍し、代表作にカール・ラッセルとバル・キルマー主演の『ツームストーン』、シャロン・ストーン主演の『クイック＆デッド』、そしてラッセルクロウ主演『L・Aコンフェデンシャル』、ダニエル・クレイグ主演の『カウボーイ & エイリアン』、ラッセル・クロウ主演の『3時10分、決断のとき』、レオナルド・ディカプリオ主演の『ジャンゴ』、ブルースウィルス主演『ラストマンスタンディング』をはじめアンジェリーナ・ジョリーやブラッド・ピットなどハリウッドのビッグスターにガンコーチし、現在では実弾の射撃経験を活かしハリウッドガンマンとして世界に知られている。

GEAR LOG FINAL.

写真：JOHNNY TOMO　構成・文：嶋根結衣　協力：橋本大介（エクシヴィ）
●主催：ギアログ実行委員会　●協力：コンバットマガジン／東京サバゲパーク／ファースト／ミリタリーブログ　●協賛：ウォーリアーズ／ガミーズ／レガスピ・タクティカル／トミーテック／ビックアウト／リアルメント／フォートレス／東京マルイ／トライス／とらのあな／コンバットアームズ／エクシヴィ／MIL-FREAKS

AA-12

Auto Assault-12 by Military Police Systems

「電動フルオートショットガン」として東京マルイから発売間近なAA-12。
その実銃は、希少な存在でもあり、実際に手に触れた人の数はごく限られてもいる。
今回は映画『エクスペンダブルズ』にも登場した、
ブランクガンをレポートする機会に恵まれた。
実銃を元に改造したものだけに、その威力は圧倒的！
カメラが衝撃で揺れてシャッターが降りなくなる中、取材を敢行した。

Report by Hiro SOGA

オートアサルトショットガン

毎秒５発フルオートオンリー、20連ドラムマガジン12ゲージショットガン。「何、それ？」というのが、普通の反応ではないだろうか。フルオートショットガン？

「ああ、そういえばUSAS-12とかいう韓国製のショットガンがあったなあ。あとAK-47にそっくりのSAIGA-12とかいうのは、セミオートだけだっけ？」とおっしゃるあなたは相当のガン通。「えーっと、映画『エクスペンダブルズ』で、ヘイル・シーザーが撃ちまくっていた、あれ？」というあなたは映画通である。そして「うん、今度東京マルイからリリースされるフルオートの電動エアソフトガンでしょ？」なんていうあなたは、これかなりの事情通というしかないであろう。

AA-12。現時点では“オートアサルト（AUTO ASSAULT）-12”の略とされているが、もともとはオリジナルデザイナーのマックスウェル・アッチソンの頭文字から“アッチソンアサルト・12”と命名された経緯もある。このあたりを少々さかのぼってみよう。

AA-12は、1972年にマックスウェル・アッチソンによって開発されたセミ/フルオート12ゲージショットガンである。1972年というと、ヴェトナム戦争がようやく終局に向かいつつある頃であったが、この“アッチソンアサルト12ゲージショットガン（AA-12）”の開発目的は、紛れもなく今でいうCQB（近接戦闘）におけるミリタリーコンバット使用であった。当初のモデルは、オープンボルトからのシンプルブローバックアクションだったが、その重いボルト（約1.4kg）に長いトラベル（後退距離）と長大なスプリングを与え、そのリコイルを押さえ込むというユニークな機構を備えていた。

1987年、マックス・アッチソンはAA-12のすべてのパテントを、ミリタリーポリスシステムズ（MPS）に譲渡する。同社のオーナー兼デザイナーのジェリー・ベイバー（Jerry Baber）によってその後18年の長きに亘り、200ヵ所近い設計変更を受け、2005年に完成

TOKYO MARUI

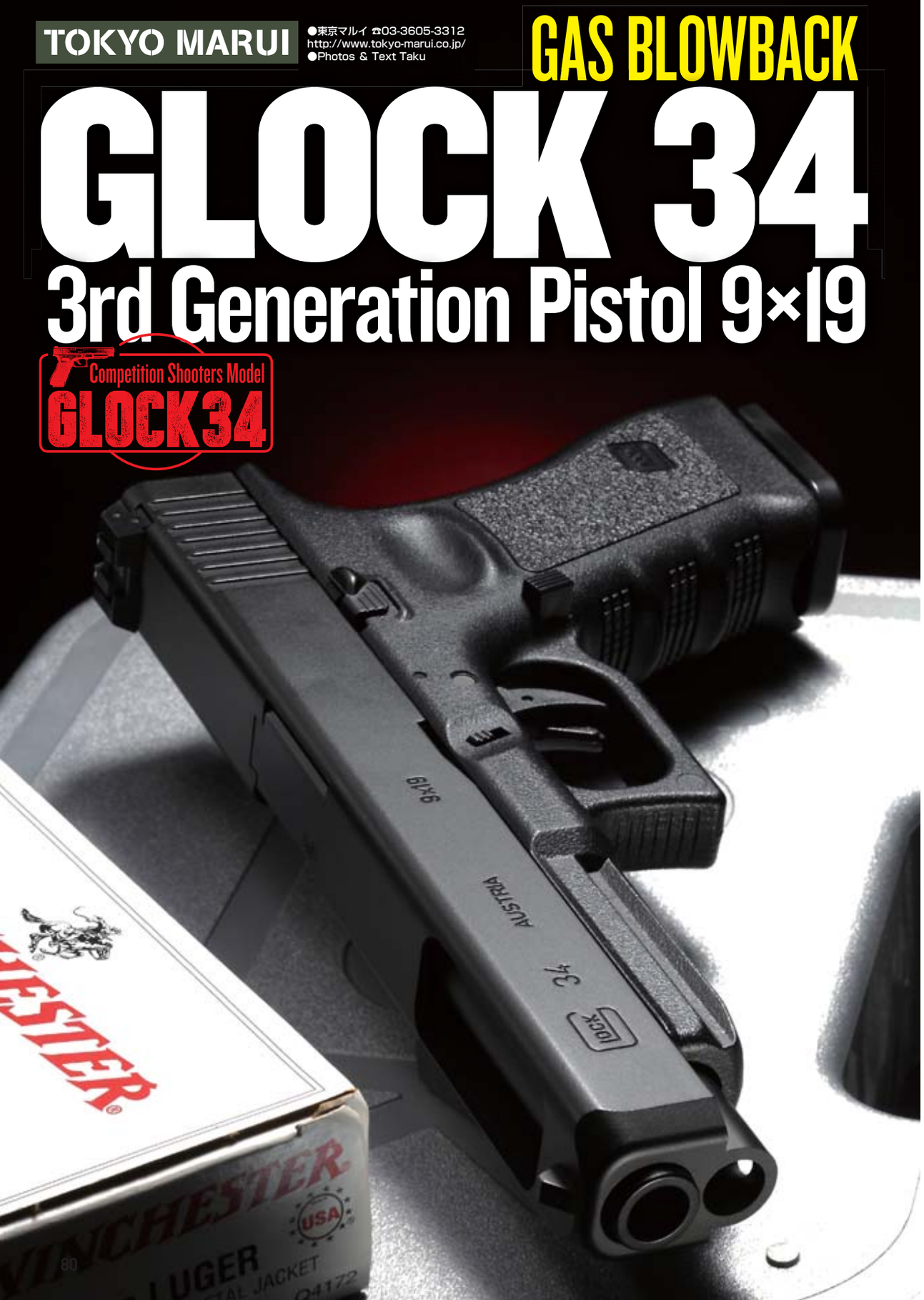
●東京マルイ ☎03-3605-3312
http://www.tokyo-marui.co.jp/
●Photos & Text Taku

GAS BLOWBACK

GLOCK 34

3rd Generation Pistol 9×19

Competition Shooters Model
GLOCK34



グロック34
●全長：222㎜
●重量：710g
●装弾数：25+1発
●価格：1万7,064円

競技用としてデザインされたフルサイズのグロック。細かい部分に競技用としての使いやすさが盛り込まれている。

グロック・ユーザー待望のフルサイズのコンペティションモデルがついに登場!!

グロック・ファン待望の5インチのフルサイズモデル「GLOCK 34」が12月4日に発売された。このリポートを読んでいる読者の中にはすでにグロック34を手にしている人も少なくないだろう。

東京マルイがグロック34を発表したのは9月に開催されたマルイフェスタだった。発表から発売まで3ヵ月ほどというのは、近頃の東京マルイでは異例の早さではないだろうか。まぁファンとしては発表から発売までの期間の短い方が嬉しいのではあるが……。

発表から発売までの期間が短いという事は、発表の時点でほぼ完成していたという事である。したがって、以前新製品ニュースで紹介した試作モデルと今回の量産品に大きな違いは特に見られない。

リポート用に送られてきた量産モデルを手に取ってアレコレと弄り回す。G17との一番の大きな違いはスライドとバレルの長さだ。一見するとそれ以外は大きな違いはないように感じられる。空撃ちをするためスライドを引いてみて気づいたのは、G17に比べて引き始めの抵抗が大きい事だ。何が原因なのか気になったのでG17と比較してみたところ、これはハンマースプリングが強めになっているからだと判った。ハンマースプリングのテンションが強いという事は、それだけハンマーを引き起こす際に強い力が掛かる。これがスライドを引いた際の抵抗になっているのだ。箱から出した直後は抵抗は強かったが、1,000発ほど撃った頃にはかなりスムーズになったので、あまり気にする事はないようだ。グロックの特性と言うか、トイガン全般に言える事だが、箱出し状態ではパーツ同士のアタリが出ていないため、少し動きの渋い個体が少なからず存

BATES

STRIKE TACTICAL ENDURANCE PAERFORMANCE SYSTEM

問い合わせ先／中田商店 ☎03-3839-6866
URL:http://www.nakatashoten.com/
Photos&Text by Tomo Hasegawa

どんな姿勢にも追従してくれる履きやすさ。これまでの機能性はそのままに新たな高性能を実現。

ベイツ最新 “ストライク タクティカル”

アウター側面とソールにハニカムデザインを盛り込み、新たな印象をアピール。どんな能力、どんな機能性を秘めているのだろうか？

タイミング良く出張があり、いきなりの実地テストを実施。新品の馴れない靴をいきなり実戦配備するのは心配だが、信頼のベイツだからこそ少々無謀な事にもチャレンジする気になれるのだ。

ソフトインソールにハニカム柄をあしらい特徴をアピール。

**頑強なだけでなく“快適さ”との融合により、
人間本来の“強さ”を引き出す。
これが現代のタクティカルブーツのコンセプト。
その最先端をいくのが“ベイツ”。高機能かつタフな製品。
安定した人気を誇るトップメーカー。
その最新モデル“ストライクタクティカル”。ついに日本上陸!**